

NVC Monthly



寝屋川映像同好会会報

第6号(091113)

発行 竹田幸男



谷 弘子氏例会作品
「アッヘン湖の旅」より



11月例会開催(例会議事参照)

- 寝屋川市民文化祭に竹嶋、竹下両氏の作品を初出品
(例会議事参照)

例会の窓

平成21年11月例会

日時 平成21年11月13日
13:30~16:30
場所 寝屋川市民活動センター
(市民会館4F) 子供部屋

出席者 天野 新井 石田 竹田 竹下 谷 田淵 (7名)

欠席者 小笠原 梶本 竹嶋 (3名) (50音別 敬称略)

例会次第 (今回の要約 竹田)

1. 議事内容

(1) 「寝屋川市民文化祭」

当同好会会員から竹下さんと竹嶋さんの2点の応募があり、11月1日(日) 10:00~16:00の間、寝屋川市立総合センター 視聴覚室で映写され、市民多数の観覧があり、映像協会会員にも感銘を与えたと思います。

(2) 大阪アマチュア映像連盟の第13回「大阪アマチュア映像祭」が10月25日(日)、大阪市立中央図書館5階大会議室で開催され当会から3名が参観しました。

(3) 他団体との交流会について

「寝屋川映像協会」と「映像北大阪」が、来年年明け(1月か2月)に交流会の開催を計画しており、今回は映像北大阪が寝屋川を訪問するので当同好会も合流を申し入れて3グループで交流をすることとしました。

(4) 来年の撮影会の詳細

日程は4月2日(金)・3日(土)の2日にして、1日目に平尾宅で準備状況を、2日目に本番を撮影するという予定を立て、準備が2日に始まるのか、田淵氏が確認することとします。

宿泊は2日の交流館14名分を押さえておく。映像協会が参加する場合も考慮し、不足の場合は武蔵の里等を考慮します。(田淵氏手配)

(5) 作品発表会の件

3/20日(土)開催として会場および打ち上げ会場「さつき」を確保しています。

(6) 来月例会・総会・忘年会

12月11日(金)市民会館での例会・総会の後、17時より松心会館けやきで忘年会を開催します。会席¥3,000+1,000

2. 作品映写

(1) ミニ S L に乗ってアッヘン湖の旅 (オーストリア) 谷さん

出た意見 :

* きれいな風景が楽しかった。 S L も珍しい。

* 最後のラストシーンは、その直前のハングライダーの場면을長くのばしてフェードアウトしたらいいのではないか。

* タイトルをもう少し短くするように工夫しては如何。

続いて、1 画面に複数のタイトルを入れる方法について活発な討論が行われました。

3. その他

(1) 次回例会・総会 : 12 月 11 日 (金) 13 : 30 ~ 市民会館 4 階予約済み

ビデオカメラ担当 : 谷さん

その後松心会館へ移動して忘年会を行います。(上記)

(2) 例会での菓子持参は、今回は自粛するとしましたが、旅行などの場合のお土産は例外としては如何、ということになりました。

例会終了直後、ゴキブリ惨殺事件が発生しましたが、当局の捜査中のため詳細は省略します。



Q. 超編で 1 つの画面にたくさんの異なったタイトルを入れる方法を教えてください。

A. 超編の「効果」 「タイトルデータの編集」で出てきた画面の右下に「新規」「コピー」「削除」があり、1 連のタイトル文字を作った後、「新規」 「テキスト」で新しい文字入力ができます。

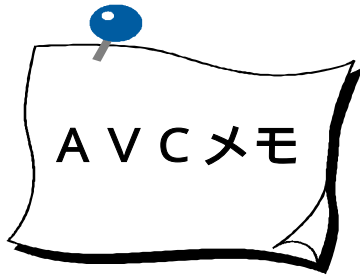
「コピー」でもタイトルを増やせます。「コピー」された物は同じ場所のできるので、マウスでつまんでドラッグしてやると分離できます。コピーした物の字を消して別の文字を入れてやります。この場合同じ字体、同じ文字大きさになるので、必要あればそれぞれ適宜に変更してやります。

Q. 超編で D V D から取り込んだところ真黒な画面しか取り込めません。Windows Media player では、きれいに映ります。

A. その D V D は、どのようなものでしょうか。一般の人が自分で作った D

V Dなら取り込めます。お店で売っているD V Dやデジタル放送を録画したD V Dは超編など編集用ソフトでは取り込めません。そういうソフトはコピーガードがかかっており、普通の方法ではコピーできません。取り込む、ということはコピーになります。

Windows Media player は再生専用ですから、コピーガードがかかっても見ることはできます。コピーしようとしないう限りコピーガードに邪魔されることはありません。(回答 竹田)



太平洋戦争開戦時のラジオ

竹田 幸男

毎年12月8日になると軍艦マーチが思い出されるのは、戦前生まれの身についてた業であろうか。

その寒い日の朝、ラジオ(当時はラヂヲ、と書かされた)から突然軍艦マーチの旋律が流れた。続いて「臨時ニュースを申し上げます。大本营発表、帝国陸海軍は本八日未明、西南太平洋においてアメリカ・イギリス軍と戦闘状態に入れり。」の緊迫した有名なフレーズ。68年経った今も声色ともに鮮明に覚えている。続いて曲は「君が代行進曲」となり、「敵は幾万」が続く。このときから4年弱の間、先の見えない世界に突入することになってしまった。

開戦の報を伝えた我が家のラジオは、ビクターの高周波2段増幅、セミトランスレス方式、ダイナミックスピーカ付き、もちろん真空管式で、当時は並四といわれた4球再生式、マグネチック型スピーカ付きのものが大勢を占める中、高周波2段・ダイナミックスピーカ付きというのは高級品であったと思う。

真空管は高周波増幅に12Y-V1が2本、検波12Y-R1、電力増幅12Z-P1、倍電圧整流24Z-K2であったと思う。スピーカは1,000オームのフィールド型ダイナミックスピーカで、ビクタートーンという、高域に独特のピークがあってアナウンスなどがクリアに聞こえる高級品だった。フィールド型というのは今は絶滅したが、永久磁石の代わりにコイルが巻いてあり、整流されたプレート電圧用の高圧電流を通すことによって磁界を発生するもので、このコイルを低周波チョークコイル代わりに使い、両端から電解コンデンサで接地することで(パイ)型フィルタを形成してリップル(波動)のある電源電圧を直流平滑化していた。

高周波2段だから同調回路は3組必要で、同調つまみを回すと減速された3連のバリコン(バリアブルコンデンサ)の羽根が静かに繰り出される様は子供心にもメカニカルな夢幻的な感覚であった。

並四と言われたラジオにつけられた「再生式」というのは、同調コイルの隣に巻数の少ない再生コイルを巻き、プレートから小さなバリコン（容量が小さいから豆コンとも言った）で同調コイル、すなわち入力側に対して正帰還をかけ、軸を回して容量を加減して感度を高めるもので、感度を上げすぎると「ピー・ギャー」という音がしてうるさかったが、懐かしい音でもあった。

セミトランスレスというのは、「鉄や銅などの貴重な資源を節約する」というような説明がつけられ、小さなトランスが用いられていたが、これはすべての真空管のヒーターを直列にしても電源電圧の100ボルトに達しないため（これらのトランスレス用の真空管名の最初の数字12 / 24はヒーター電圧を示す）電圧を合わせるためだったと思われる。そうしない場合は安定抵抗管というのを直列に入れるが、これが電力を無駄にするとの設計思想によると思われる。

高周波2段増幅のメリットは、（1）感度が高まり遠くの局が聴けること、（2）選択度が良くなり近接した局の混信を避けられること、（3）信号対雑音比が向上して遠くの局の雑音が少なくなることが挙げられる。しかし、今と違ってすべての放送局が同じ内容を放送するので、一局だけ受けられればラジオとしての使命を達する世の中だった。というのは、内容が違ふとコールサインで局名を言わなければならない、それを敵機が探知して現在位置を割り出すから、という根拠だったようだ。GPSのない時代である。だから高周波2段増幅というのは宝の持ち腐れだった。余談だが、ラジオでの空襲情報では「敵機は山城上空を北上中」とか「摂津近辺にあり」などと、昔の地域名を使って隠蔽しようとしていたが、これなんかも対比表を使えばすぐわかってしまうのに、と子供心ながら思っていた。

敗戦になり、このような必要がなくなり、またまもなく民間放送が始まって、局数も増え、並四では混信してダメと、選択度のよいスーパーヘテロダイン方式の世の中となった。5球スーパーが標準となり、周波数変換6W-C5、中間周波増幅UZ-6D6、検波・低周波増幅6Z-DH3A、電力増幅6Z-P1またはUZ-42、整流KX-12FまたはKX-80のラインが定番となった。メーカー製ラジオは1万円以上したので、ラジオ部品店で部品一式をそろえれば3,000円ぐらいで間に合い、いいアルバイトになった。

組み立てはシャーシに取り付けた真空管ソケットの端子を基準に単品のコンデンサや抵抗を取り付け、今のようなヤニ入り半田もなく、ペーストをマッチ棒などで接続部分につけた後、延べ棒のような太い半田を半田鑊（はんだごて）に取って一つ一つ接続していった。ジュツという音とともに煙が上がり銀色の玉が滑らかに接続部分を覆って半田付けが完了する。回路はパターン化され、変更の余地もほとんどないので、配線図は頭の中にあり、記憶のまま何も見ず

に組み立てて、電源を入れて一発で音が出る、というのが無上の喜び、楽しみだった。今、パソコンを組み立てて一発で動く、というのが似た感覚だが、パソコンの場合は半田ごてが不要でコネクタの接続だけで済み、昔のラジオのように単品の部品の組み合わせではなく、部品がたくさん付いた基板単位の組み合わせであること、また電源が入ってからの道のりが長いので、そういった点は少し違っているように思う。

とはいえ、この数十年の間の科学技術の進歩は驚異的であり、その最も変化の大きい時期に身を置いたものだとつくづく感じている。

ここで気がつくのは、真空管がトランジスタに変わり、それがIC、LSIへと進化して、アナログがデジタルになり原理的にも構造的にも全く変わった形に何段階も進歩しているのに対して、スピーカはフィールドコイルがマグネットに置き換わったぐらいで、相変わらずアナログであり原理的にも構造的にも、ほとんど変化がないことである。物によって変化の程度が全く異なるのは面白いことだと思う。科学技術の先端が驚異的に進化しているのに対して、人間の心、行動、欲望はそれほど、いや全く進歩していないのを象徴しているような対比であると思う。

今月は、以前に書いた「DV」に続いて「HDV」について書こうと思っていましたが、突然に思い出がよみがえり、昔の話になってしまいました。専門用語ばかりで、技術屋でない人にはわかりにくかったと思います。次回からは、またわかりやすく書くようにします。 ■